青山学院大学 総合文化政策学部

総合文化政策学部では、21世紀の街や暮らしを生き生きとさせるために、新しい文化創造の可能性を引き出すセンスを自ら磨き、地域や都市のデザイン、国際的な文化交流を担う文化やアートのトータルプロデューサーを育てます。





■大学生
志倉也美 さん



■先生
内山隆 先生



■卒業生
岡田愛由 さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

青山学院大学総合文化政策学部の特徴を教えてください。



■先生

総合文化政策学部は、2008年に設立され、この4月に10期生を迎えた青山学院大学の中でも比較的新しい学部のひとつです。20世紀の間、日本はものづくり大国として製造業を中心に発展してきました。しかし、今後の国際競争を見据えたとき、いつまでも製造業で順調に成長していけるかどうかはわからない。そこで、製造業の次の21世紀の日本の国家成長戦略の柱のひとつとして期待されたのが、知的財産――特許とコンテンツです。

00年代後半くらいから、コンテンツ産業はクールジャパンという名称で大々的に世界へと輸出されていきました。こうした時代背景を受け、文化を実学として学び、この国のアートやカルチャーをプロデューサーの視点からマネジメントできる人材を育成するために誕生したのが、この総合文化政策学部です。

クリエイティブという観点で言えば、すでに美大や芸大、あるいは芸術学部を設けている総合大学は数多くあります。それら既存の教育機関との違いを申し上げると、いわゆる前衛芸術を追求する

クリエイターを育てるのではなく、きちんと収支を管理し、自分たちのコンテンツがいかに社会の中で経済価値を生み出すか、ビジネスモデルの構築までをトータルにプランニングできるプロデューサーを育てる学部だということです。そのためには、クリエイティブの素養を磨くだけではなく、経済学や経営学などの知識が欠かせません。私たちは、青山・表参道という日本の文化の発信拠点という立地を活かしながら、実践を通じて文化の担い手の育成に取り組んでいます。

先生の専門分野を教えてください。

■先生

私は経済学・経営学をベースに、日本の放送産業あるいは映画・映像産業の研究に取り組んでいます。たとえば、放送局には様々なセクションがありますが、その中で最も権限のある部署はどこだと思いますか。答えは、編成局です。編成局とは、その局の番組の編成を決める部署。番組のタイムテーブルの決定から予算の振り分けまで、編成局が権限を握っています。言わば、その放送局の核となる部署。そして、その編成局が番組の配置や予算の分配を決定する上でインプットとアウトプットの関係をしっかりと考えなければならない、経営学や経済学は必要な知識なのです。私は、こうした「メディアとエンターテイメントの経営戦略と経済政策」をテーマのひとつに、研究を行っています。

ゼミでは具体的にどんなことをしていますか？

■先生

今お話ししたことを自分たちの経験を通じて学べるように、自主映画の製作を行っています。とは言え、単に自主映画を撮るだけでは、他の美大や芸大と変わりありません。しっかり実学として文化を学んでいただくために、映画をつくって終わりではなく、資金調達から実際にどれだけ多くの観客に観ていただけるかまでを学生主体でトータルに考えることができるのが本ゼミのポイント。監督育成ではなく、プロデューサー育成の場であると考えていただくとわかりやすいかもしれませんね。

おふたりが総合文化政策学部を選んだ理由を教えてください。



■大学生

もともと私はテレビ業界を志望していて、番組制作の仕事がやりたいと思っていたんですね。それで大学をいろいろ調べていくうちに、この学部を見つけてパンフレットを読んだんですけど、真っ先に目に飛びこんできたのが、内山ゼミの写真でした。ちょうど今先生が話されたような撮影風景の写真が載っていて。それまでは青山学院大学と言えば英語のイメージしかなかったので、こんなことも学べるんだとビックリしました。しかもよく読んだらゼミで映画製作ができると書いてあって、絶対ここに行きたいと思って推薦を受けました。

■卒業生

私がメディアに興味を持つようになったのは、高校時代の留学がきっかけでした。台湾に１年間滞在したのですが、台湾には親日家の方がすごく多くて。彼らの日本愛の源となっているのが、日夜現地に溢れ返る日本のテレビ番組や雑誌でした。そのとき、メディアが民衆に与える影響力の強さを実感したんです。そこで、メディアについて学べる大学に行きたいなと思って、この学部を受け

ることにしました。

■先生

以前、学生にアンケートをとったことがあるのですが、「メディア」というワードに興味を持って志望する学生が多いですね。正直に言えば、例えばキー局への就職はとても難しいものです。しかし、総合文化政策学部からは毎年ひとりはキー局の進路を得る者を出していて、このあたりも魅力的のようです。あとは、青山という土地柄に惹かれて希望する学生も少なからずいると思います。

■卒業生

それは確かに大きいですね。私も青山に通学できるなんてカッコいいと思ったのを覚えています。

●大学生活について

大学でどんなことに取り組んだか教えてください。

■大学生

いちばん印象的だったのは、この３月に開催した「AOYAMA FILMATE」という学生映画祭の代表を務めたことです。もともと学級委員をやったり、人の上に立つのが好きな性格で、やってみたいなという興味は持っていました。だけど、具体的に何をするかは一切知りませんでした。いざ始まってみたら、毎日が本当にもう大変なことだらけ。でもその分、他ではできない貴重な経験がたくさんできたと思います。

具体的にはどんなことをするんですか？

■大学生

まずはゼミ生が運営委員を務めるので、誰にどの役割を任せるか担当を割り振りします。「AOYAMA FILMATE」はコンペ形式の映画祭。他大学や専門学校から作品を募集します。そこで、例年映画祭のコンセプトを策定するのですが、そのコンセプトを決めるのも大事な仕事のひとつです。他にも広報用のパンフレットの企画や進行管理など、仕事内容を挙げるとキリがありません。映画祭の立ち上げから内容の決定、広報・集客、当日の運営まで、責任者としてトータルマネジメントするのが、代表の役割です。

■先生

「AOYAMA FILMATE」がスタートしたのは 2012 年。この映画祭の創設自体が、総合文化政策学部の特色をよく表していると思います。内山ゼミでは卒業制作として映画をつくるのですが、単につくって公開しても観に来るのはゼミ生の家族や友人だけ。それでは面白くないということで、もっと多くの人に観ていただける出口をつくらなければという課題がありました。そこで浮かんだのが、映画祭の開催です。他大学の団体にも声をかけ、作品を集めることで、観客の分母を拡大することが狙いでした。映画祭では、映画好きの方に興味を持っていただけるよう、毎回ゲストをお招きするなど、集客アップに向けていろんな工夫を凝らしています。

■大学生

ゲストスピーカーの人選や出演交渉も、私たち学生が行います。きちんとした形で社会人の方と直接やりとりをさせていただいたことは、すごく貴重な経験になりましたね。今まで先生以外の大人とコミュニケーションをとる機会なんてありませんでしたから、正しいメールの書き方からもうわからない。最初は文面もメチャクチャで、よく先生から叱られました。おかげで、今はビジネスメールも少しはきちんと書けるようになった気がします。

■先生

たとえば今年なら映画監督の堤幸彦さんにお越しいただきました。まずは窓口となる事務所のプロデューサーの方に企画を説明し、ご賛同いただくところからのスタートでした。それらをすべて学

生中心でやってもらいます。他にも協賛企業との折衝であったり、映画祭を実現するためには欠かせない裏方業務もほぼ学生に任せしました。

■大学生

お招きするゲストの方は、みなさんその道でご活躍されているプロフェッショナルです。学生相手だからってなあなあではいけない。せっかくご協力くださった方に嫌な思いをさせてしまったら、それは私たちのミスです。ぜひ来年も呼んでくださいと先方から言っていただけることを目標に、とにかく失礼がないよう対応には細心の注意を払いました。

岡田さんは在学時の思い出は何がありますか？



■卒業生

私も内山ゼミで学んだことがいちばん印象に残っています。中でも、社会に出て改めて役に立っているなと実感するのが、調整力です。私も人をまとめるのが好きな性格で、映画製作でもプロデューサーの役職に就いていたのですが、キャストのオーディションから撮影クルーの手配、機材の手配とやらなければいけないことが山積みでした。

脚本・監督・編集に関してはゼミ内でまかないますが、いわゆるカメラや音声、照明といった技術スタッフに関しては、外部のプロにお願いしました。社会人と折衝・交渉することは、こういうゼミでないとなかなか経験できないことです。社会に出る前から社会人としての素養を鍛えてもらった感覚があります。また、製作を進めていく中で、予期せぬトラブルや対立が発生し、チーム内に亀裂が走ることもあります。そんなとき、それぞれの言い分を聞きながら、双方にとってバランスのいい着地点に上手く誘導させるのも、プロデューサーの役割です。社会に出てもチームで仕事をする上で、そういったバランス感覚や調整力は非常に重要になってくるので、それを学生のうちにトレーニングできたのは、すごく有意義だったなと思います。

■先生

学生たちはみな早晩社会に出る身。だから、こうした活動を通じて、どんどん大人と付き合いなさいということは、私からも学生によくアドバイスしています。これこそが、まさに大学における実学だと思うんですよね。

私がひとつのモデルとして描いているのは、まだ御茶ノ水にキャンパスを置いていた時代の中央大学法学部です。当時の中央大学法学部は「白門」と呼ばれ、東大法学部の「赤門」と並び、法の名門と称えられていました。その強さの秘密は、法曹界に入った OBOG が積極的に古巣を訪ね、後輩たちを指導していたからです。その上下のつながりの強さが、中央大学法学部を別格の存在としていました。ですから、私のゼミでも、プロの方が直接訪れ、学生と交流を持てる場づくりに関しては非常に大事にしています。

■卒業生

もちろん金銭面の交渉も自分たちでやります。とは言え、学生主体の企画ですから予算は決して潤沢ではありません。限られた製作費の中からいかにプロの方へのギャラを工面して、先方にご納得いただくかという交渉スキルも、ゼミを通じて学ぶことができましたね。

その他、青山学院大学総合文化政策学部の特色を教えてください。

■先生

ゼミとは別に、「ラボ（ラボ・アトリエ実習）」と呼ばれる演習授業が本学部にあります。これは産学連携で行う実学・実践の場で、附置研究所である「青山コミュニティ・ラボ」を拠点に、キャンパスの中だけにとどまらず、時にはインターンのように実地演習を重ねながら、社会人として活躍

するために必要な能力を開発します。
たとえば、今年の私の担当するラボでは、カメラメーカーのオリンパスさんと提携し、「カメラ女子を増やすプロジェクト」を行っています。スマホ全盛の裏側で、今やカメラは厳しい冬の時代。いかに販路を拡大するかに、各メーカーがアイデアを練っています。その中でオリンパスさんが10年ほど前から力を入れているのが「カメラ女子」というキーワード。ファッション感覚でオシャレにカメラを楽しむというスタイルを、トレンドに敏感な女性に向けて発信し続けています。
そこで、若い女性の間でも感度が高いことで有名な青学女子に話を聞きたいということで、今回のコラボレーションが実現しました。具体的には、ラボに参加した学生がオリンパスさんに対して販促プランをプレゼンし、もし承認がいただければ、実際に予算をつけて実行に移すということをやっています。

印象的だった授業はありますか？

■卒業生
一度、特別授業として、元伊勢丹のバイヤーの方をお招きして、渋谷にあるヒカリエ誕生の裏側を教えていただいたことがあったんですけど、それはとても面白かったですね。なんでもヒカリエは、香りが人に与える効果というものをすごく意識されているそうで、お手洗いもいい匂いがしたり、フロアごとに香りの印象を変えていたり、細部にまでこだわってつくられているそうなんです。ちょうどそれがヒカリエがオープンする頃のことで、実際にその話を聞いてから行ってみると、また見え方が全然変わりましたね。普段何気なく使っているファッションビルやモールのこだわりを知ることができて面白かったです。
■大学生
私が印象的だったのは、プロジェクトプロデュース論という授業です。チームに分かれて、30秒くらいの学内のPR動画をつくろうという内容で、テーマの企画から撮影・編集まですべて学生が行います。私のチームの作品は、青山学院大学にいらっしゃるネイティブの講師の先生方に、私たちが用意した日本の駄菓子の中から気になったものを食べていただいて、実際にどれがいちばん美味しかったか判定してもらうというものでした。それを番組形式に編集して、最後の授業で発表しました。他チームの発表もすべて見られるのが、この授業のいいところで、みんなの視点の違いや発想の面白さもわかって、すごく楽しかったですね。

青山学院大学ならではのキャンパスライフの楽しみを教えてください。

■大学生
周りにオシャレなカフェがいっぱいあるのは魅力的でしたね。お昼はあまり学食に行かず、いつも近くのカフェでランチをしていました。
■先生
以前調査したのですが、学外でのカフェランチは、学生にとって“ハレ”の場です。いつもより気合いの入った恰好の日のお昼はランチ。ラフな恰好のときは学食で、それは“ケ”の場という傾向があるんです。
■卒業生
そのお話、よくわかる気がします。カフェめぐりをしていると、自然と自分のお気に入りのカフェが見つかるので、それがまた楽しいんですよね。私のお気に入りは神宮前のマーサーカフェ。お昼や授業の合間によくそこで時間を潰していました。
■大学生
　私もよく空きコマができたときは外にクレープを食べに行ったりしていました。外苑前に美味しいクレープ屋さんがあるんですよ。散歩がてら友達と足を伸ばしてみたり。あとは土地柄、有名人

の方を見かける機会が多いのも、ちょっとした楽しみかもしれません。

■卒業生

学内にもオシャレな子が多いですよね。読モ(読者モデル)をやっている子が周りに何人もいました。

■大学生

あとは行動力のある人が多いのも特徴だと思います。たとえば「AOYAMA FILMATE」ではミュージックビデオ部門を設けているんですけど、そこにシンガーソングライターとしても活動している同級生の男の子が応募してきてくれたんです。すごくキャラクターの強い子で、ゲストとして来てくださった堤監督にも自分から積極的に話しかけていました。結果、そのアピールが実を結んで、今度堤監督と一緒にお仕事をすることになったそうなんです。同級生としては悔しい部分もあるけれど、それは彼が自分から行動を起こして掴んだチャンスです。素直にすごいなと思うし、そういうアクティブな人が多いのも、青山学院大学のいいところだと思います。

●就職活動、仕事について

卒業後の進路について教えてください。



■卒業生

いくつか広告系の会社も受けましたが、基本的には映画業界に絞って就職活動をしました。そして、縁あって第一志望の松竹に入社することになりました。入社後はグループ会社に出向し、新宿ピカデリーやMOVIXなど自社で運営する映画館のラインナップを決める仕事を担当しています。この仕事の面白さは、お客様の顔がちゃんと見えるポジションに立てること。自分がこれにかけるぞと決めた作品にお客様が来てくれるのは単純に嬉しいし、最終的にどれだけ売り上げがあがったか収支まで自分の目で確認できるところはやりがいを感じますね。

もちろんどれだけ想いをこめて選んだ作品でも、残念ながらヒットに結びつかないこともあります。でも、当たったときは本当に嬉しい。最近で言えば『この世界の片隅に』のヒットは印象的でしたね。当初、配給会社からお話をいただいた段階ではまだまったく注目されていなくて。でも試写で観たときから絶対これはうちで扱うべきだと思って、他の映画館を担当している人にも社内営業をしました。ただ、なかなか作品の良さが伝わらなくて、結局弊社の運営している映画館で上映にこぎつけることができたのは、私の担当しているMOVIXだけ。そしていざ蓋を開けてみたら、ご存じの通りの大ヒット。心の中で「やった！」とガッツポーズをしました。

■先生

総合文化政策学部の進路はいい意味でバラバラです。250人学生がいれば、ほぼ250通りの進路があると言っても過言ではありません。その中で特色を挙げるとしたら、やはりメディア系に対する就職実績の強さですね。放送系のみならず広告代理店や映像系の制作会社、映画配給会社など、毎年何人かは大手に就職を決めています。

■卒業生

私が松竹から内定をもらえたのも、内山ゼミでの経験があったからだと思っています。映画業界を志望する学生は、基本的にみんな映画好き。映画のことなら何時間でも蘊蓄を語れるという人は珍しくありません。けれど、じゃあ映画というコンテンツをどうやってビジネスに落とし込むかという視点に立って自分の意見を語れる学生はごくわずかです。私の場合、映画をつくるだけでなく、

上映会イベントを企画して、お客さんの呼び込みから資金回収までをゼミでやれたことがすごく強みになった。映画に対する蘊蓄は語れなくても、自分がゼミの経験を通じて学んだことはいくらでも話せたので、そこが企業からも高く評価してもらえたんだと思います。

● 5 年後に向けて

5 年後のキャリアプランを教えてください。



■大学生

入学前から番組制作は私の憧れだったので、やっぱりテレビ局への夢は捨てたくないですね。もちろん大学に入ってずっと映画に関することをしてきたので、映画に対する想いもあります。だから、できればテレビ局の映画製作部に入るのが、いちばん理想のキャリアプランです。今から５年のうちにどこまで成長できるかはわからないですが、少なくとも「あの子は今まで見てきた中で一番使える」って周りに思われるような人材になりたいです。

■卒業生

　私は５年後には結婚して子どもがひとりくらいいるといいなとは思っています。もちろん家庭を持ったとしても仕事は続けたい。もともと洋画の買い付けがしたくて松竹に入ったので、５年以内にそのポジションに就いていたいですね。その上で、世界中から自分の目利きで集めた映画を日本で上映することが、私の夢です。

■先生

今度カンヌに行くんだよね。

■卒業生

そうなんです。今年、初めてカンヌ映画祭に行かせていただくことになりました。私にとっては、夢への第一歩。今からすごくドキドキしています。

■先生

私がこれから研究者として深く掘り下げたいと考えているテーマは、放送とインターネットのあり方ですね。今、メディアはチェスのように王様の交代が行われようとしています。ネットにおける映像配信の普及により、従来の放送、映画という映像コンテンツがどう変わっていくのか。新興産業の台頭による勢力図の転換について詳しく研究をしていきたいと思っています。

●高校生へのアドバイス

高校生のみなさんに、高校生活を送る上でのアドバイスをお願いします。

■先生

勉強って限りがないんです。向学心さえあれば、どんどん新しいことを学んでいける。限界を決めず学業に邁進できるのも高校生活の特権。ぜひ学ぶことを楽しんでもらえたらいいですね。

■卒業生

高校生活という限られた時間の中で、ぜひ自分のやりたいことを見つける努力をしてほしいですね。私は幸いにも１年間台湾に留学する機会に恵まれ、そこでメディアに携わるという自分なりの夢を見つけることができました。この経験は、今振り返っても、すごく大きかったなと思います。

厳しい言い方かもしれませんが、社会に出た後も自分のやりたいことを見つけられず、何となく働いている人はたくさんいます。これからの時代、男女に関わらず仕事は一生のテーマ。人生の大半を、

人は仕事に費やします。だったら、自分が楽しいと思える仕事を見つけた方が絶対にいい。ぜひ高校生の間に、そのきっかけとなるものを見つける努力をしておいてほしいですね。

■大学生

どんなことでも、やる前からこれは無理だと諦めてほしくないなと思います。実を言うと、私は高校の頃、全然勉強ができなくて成績は、常に学年でも最下位レベル。それが、青山学院大学に行くんだという目標を決めてから、ようやく本気スイッチが入った。推薦入試で入学するために、とにかくできることを頑張ろうと思えるようになったんです。すごく辛い時期もあったけど、諦めずに頑張ったから、こうして第一志望の大学に行くことができました。頑張ったら頑張った分だけ結果が出るというのはあながち嘘じゃないんだと気づけたのは、高校生活における大きな収穫のひとつです。だから、みなさんも自分にはこの大学は無理だと諦めず、結果が出るまでやり続けてほしいですね。

●大学構内のお気に入りのスポット

■先生

やっぱり研究室がいちばん居心地が良いですね。部屋が今の校舎に移動してからは一層使いやすくなりました。

■卒業生

2号館のコンピュータールームが好きでした。自由にパソコンを使えるし、中は静かなので、ちょっと空き時間ができると、よくここで過ごしていましたね。

■大学生

私は間島記念館が好きです。国の登録有形文化財に登録されている青山学院大学の象徴的な建物なのですが、中は給湯室があって電子レンジがあってソファがあってエアコンも効いているので、時間を潰すのには最適。利用する学生も少ないので、のんびり過ごすのにぴったりな秘密の隠れ家です。

●インタビューに答えていただいた方々●



■先生

内山隆先生

青山学院大学総合文化政策学部教授

富山県立富山中部高等学校出身。南山大学経済学部経済学科卒業。学習院大学大学院経営学研究科博士後期過程満期退学。千葉商科大学商経学部専任講師、助教授、教授を経て現職。（財）電気通信政策総合研究所嘱託研究員、慶應義塾大学新聞研究所 / メディアコミュニケーション研究所・研究員、フロリダ大学訪問研究員、特定非営利活動法人映像産業振興機構理事、日本民間放送連盟研究所客員研究員、総務省情報通信政策研究所特別研究員(招へい研究員)、公益財団法人情報通信学会副会長、等を兼務。専門は「映像コンテンツ産業の経営戦略と政府経済政策」。



■卒業生

岡田愛由さん

株式会社松竹マルチプレックスシアターズ勤務

私立清林館高等学校出身。青山学院大学総合文化政策学部総合文化政策学科卒業。松竹へ入社後、１年目から同社に出向。自分が「これは！」と思って上映した作品がヒットしたときの達成感にやりがいと喜びを感じるという。将来の夢は世界中から目利きで集めた映画を日本で上映すること。その第一歩として今年５月、カンヌ映画祭へ。



■大学生

志倉也美さん

青山学院大学総合文化政策学部総合文化政策学科３年生（2017 年 4 月取材当時）

私立共愛学園高等学校出身。高校時代は学級委員長、文化祭の実行委員長をつとめた。大学入学後、内山ゼミナールに所属し、昨年度は「AOYAMA FILMATE 2017」（コンペ形式の映画祭）の実行委員長となり、責任者としてトータルマネジメントをする貴重な経験をする。「今まで見てきた中で一番使える」と周りに思われるような人材になるのが目標。